

所信表明

二〇二一年度中央常任副委員長選挙所信表明

常任副委員長候補

経営学部 二回生

森本 晴絵

この度2022年度常任副委員長に立候補いたしました、経営学部二回生の森本晴絵です。私は、今日の学友会が抱える一番の課題点を主体者不足であると認識し、この課題解決を基軸としながら、常任副委員長における職責を果たします。

石川次期常任委員長から常任副委員長をやってみないかとお誘いをいただいた日からずっと、私は常任副委員長になったら何ができるのだろうか、と考えていました。常任副委員長というものは畢竟、常任委員長のサポートをすることがお仕事なのですが、それだけが求められているのではないでしょう。どうしようかと考えた結果、たどり着いた結論は、「中

央パートのマネジメント」です。常任委員会は、全学生のために活動することはもちろんですが、中央パートに所属している皆様に満足していただける環境を提供することも、大切な役割の一つです。私は、ここにいる各学部自治会、課外三本部、事務局、中央事業団体に所属するすべての学生が、「学友会に居てよかった」と思える瞬間を、一瞬でも多く作りたいのです。各パートの現状をみれば、三役を集めることすらままならない状況や執行委員の数が足りず、より発展的な活動を行うことが難しい状況が散見されます。私の所属する経営学部自治会も例に漏れず、現在も三役を立てることすら苦しい状況です。このような事態が起こっているのは、各団体が現状を変えようと試みるも、自団体だけでの改善は難しいという理由からではないでしょうか。さて、皆様に一つ質問があります。あなたは、後輩に自信を持って、自身の所属する団体をお勧めできますか？先輩が自信を持って後輩に自分の団体をお勧めできなければ、持続可能な学友会は一生来ません。この一年で全団体が「Yes！」と答えられるように、また、少しでも中央パートを好きになってもらえるよ

うに尽力いたします。このことは、石川常任委員長が所信表明に掲げていた、「持続可能な学友会への転換」に大きく貢献することだと考えます。

具体的には、中央パートリーダーズキャンプ（※以下中パリ）以外でも、オンラインや各キャンパスを使用した日帰りの対面形式などで交流会兼研修を多く行いたいと考えています。以前はこのような趣旨のイベントが年に二度の泊りがけの中パリのみであったため、参加できなかった役員や中パリ以降に中央パートに参加した役員は来年度の中パリを待たせられませんでした。これは改善するべき点ではないでしょうか。特に、昨年度は新型コロナウイルス感染症予防対策の観点より、中パリが中止になりました。未だこの新型コロナウイルス感染症が収まる気配はなく、今年度の中パリ開催も危ぶまれています。私自身、これまでの学友会における年長者、経験者のみなさまからのご指導・ご鞭撻なくして経営学部自治会委員長としての職務を行うことはできなかったと感じています。しかし、同時にそれらが提供される機会はコロナ禍ということもあり、とても限定的だったとも感じてい

ます。新型コロナウイルス感染症の感染リスクの低い形態で行われる研修の機会を多く設けることで、統一感のある教育が成されるとともに、個々の「何をどうすればいいのかわからない」というストレスを減らし、快適かつスムーズな職務遂行の手助けになると考えます。

この政策のもう一つの長所として、中央パートの持つ素晴らしい特色である他学部交流の盛んさを生かすことができることが挙げられます。交流会兼研修を重ねていく中で交流を深め、色々な考えや意見を沢山吸収し、多様な価値観を養うことができたら、それは一生ものの宝物です。学友会の皆様「学友会に居てよかった」と思える中央パートに近づくと、則ち各々の団体が後輩にお勧めできる団体へと転換を図れると考えられます。

また、学友会の抱える問題として、情報発信の多言語化が挙げられます。これに対しても、私一人の力では難しいかもしれませんが、総合大学である強みを生かし、複数のパートと協力して解決することができたらと思います。その他、任期中に明らかにされるであろう様々な課題に対し、常任副委員

長として職務を全うしていく所存です。

以上が、私の所信表明になりますが、これを一言で申し上げますと、「学友会をおもしろくする」に尽きます。そして、皆様がこの1年間幾度となく「学友会に居て良かった」と思える瞬間を創造して参ります。今後ともどうかお力添えの程宜しくお願い致します。お読みいただき、本当にありがとうございます。ございました。

常任副委員長候補

総合心理学部 二回生

尾崎 斗熙

この度2022年度常任副委員長に立候補いたしました総合心理学部 二回生の尾崎斗熙です。ここでは、立候補するに至った経緯、政策における方向性、またわたくしがこれまでの学友会における活動を振り返り得た経験と思考等を含めて記述してまいります。

【経緯】

まずは経緯についてお話いたします。今回、わたくしが常任副委員長に立候補する前に、ご存知の方もかなりいらっしゃると思いますが、常任委員長に立候補しておりました。しかしながら、当時の所信表明を見ていただければご理解いただけますように、祖母が急逝しその事後処理や家族のグリーフケアといった家庭の事情によって準備を行えるはずだった期間にほとんど何一つ準備を行うことができず、結果的に所信表明においては、政策論について論じることができず、あろうことか組織運営における自身の手腕のみを標榜する形となってしまいました。

結果として、常任委員長選挙が行われた当日も政策論だけでも行うことができればと思い、何とか時間を作ろうとしたものの、当日も諸般の事情によって出席することも叶わず、予定していた候補者同士での議論を行うこともできずに、2022年度常任委員長にも大変なご迷惑をおかけしました。

これらのいきさつをもって、このままでは、何の政策も持たず立候補し自身の状況紹介のみを行った人間になってしまふと考え、今回常任副委員長選挙に立候補し、改めてわたくしの政策論を少なからず紹介するとともに、先般2022年度常任委員長に信任された新委員長をこれからの一年間、さまざまな議論体系での支援や行動的支援などによってお支えすることができればと考え、立候補するに至りました。もちろんのことながら、ここではすでに信任を得ている新委員長を支援する形でわたくしの考えを紹介していく形となりますが、その点につきましては、常任副委員長がそもそも委員長の補佐をする立場にあることを十分に理解した上での記述だと考えご拝読頂きますと幸いです。

【政策の方向性】

ここでは、主に学友会のワンオペレーション問題、学友会各種役員及び、中央事務局各局員等に対する報酬の支払いシステムの整備について、全学協議会についてのわたくしの政策指針並びに補佐の立場からの支援について記述しております

ます。

第一にワンオペレーション問題について記述します。現状、立命館大学学友会は、主体者不足は言わずもがなの恒常問題として挙げられるものの、もう一つに行き過ぎた過重業務がそれぞれの自治会や組織体の負担になっているということが挙げられます。仕事についても組織に人はいるもののワンオペレーションで仕事をこなし、結果的に一人で仕事を回している状況になっていることが散見されます。このような状況こそ、現代日本におけるブラック企業の組織体系と同じ状態にあると考えます。確かに、ブラック企業が我が国のGDPに大いなる貢献をし、現在も我が国が世界経済ランキングでも上位という高順位を保つことができている所以であることは、誰しもが認めることではあると思いますが、このような組織体系を果たして学生組織にまで持ち込む必要があるのかということは一考のいや多考の必要があるように考えられます。自治活動、学友会活動はボランティアの一環だと言われてしまえば、それで収束できる話かもしれませぬ。しかしながら、我が学友会には長年の歴史の中で構築されてき

た実績と確かな行動力があつたからこそ、維持できているものであると考えます。このような実績と歴史がある組織が、ワンオペ業務で忙殺される日々を送る一部の学友会員のみで運営され続けていっていることは、大きな問題であると考えます。もちろんのことながら、ワンオペでしか回らない仕事や業務などがあることも十分に理解しているつもりであります。そのため、このような問題を解消するためには、広報活動強化や役員登用へのリクルーティングは欠かせないものであると考えます。我々、中央委員会に出席している役員のほとんどはきつと学友会の仕事に忙殺されることが一度や二度ではないはずです。今回、新委員長の掲げた施策の中に業務の効率化というものがあります。ただ、業務執行率向上を上げるためであれば、個人負担を増やせばなんとかするのが社会というものです。ここで少し話がずれますが、実際に臨床心理学者のカルロロジーはカウンセリングにおいて、重要なことのひとつとして、ストレスサーの排除を上げています。これは何が言いたいかというと、個人への負担が高まっているとき、その負担を周囲で共有することでその

ストレスを軽減させ、結果としてストレスラーの排除を行うことができるというものです。しかしながら、反駁として「ロジャースはストレスに向き合うことが重要である」と説いたとされるのではないかと考える人も出てくるかと思えます。確かに、ストレスに向き合うことは重要です。しかし、それはあくまでも向き合う状況を作り出すことが重要であり、本当に辛い人からすれば、その解決は他人からの支援が無ければ成すことができないのです。今回のように、規約にない慣例の見直しを行っていくことで、正にワンオペなどの過重業務に待ったをかけることができるのではないかと考えております。その上でも規約の見直しにおける補佐や文書作り、進言といった細かな作業ベースの仕事などの業務についてしっかりと新委員長のサポートすることができればと考えております。

第二に、学友会各種役員及び、中央事務局各局員等に対する報酬の支払いシステムの整備についてです。この施策については新委員長と全く同じことを考えており、正当な労働に正当な報酬が支払われることはまさに組織体を維持していく

うえで非常に重要なことであると考えております。ぜひこの制度については新体制に加入することができたならば、確実に成し遂げていきたい施策の一つであります。ぜひ常任役員一丸となって支払いシステムについて熟考し、形あるものにするのができればと考えております。

第三に全学協議会についてです。来年度は、全学協議会が開催される予定であります。ここにおいて、前回の全学協議会で「学費負担の納得感」という言葉が飛び出しました。確認したところ前回の学費提起においては、学費算定基準には手を付けてはいなかったものの、入学金を周囲の大学群に合わせて10万円ほど安くしました。しかし、一回生に対する特別減免措置を失くし、結果として年間負担額が多くなったという現状が発生しました。また、大学側としては学費は法律的にも常任理事会で決めるものであるとし、全学協議会ではあろうことか学費決定の説明をする場であるとしたようです。その上で、「学費負担の納得感」なる言葉が飛び出したとのことです。これでは、全学協議会において学費「提起」をする意味が全くないように考えられます。私としてはこの

ような既定路線ありきでの学費決定はいささか許しがたいものがあると考え、全学協議会における事前の打ち合わせ等においては、学生の意見を聞いたうえで学費決定になるように働きかけるとともに、教学、財政のいずれに対しても学費に対する徹底した納得を得られる説明を求め、大学側からの学費提起等についてしっかりと目を見張る思いで、全学協議会に参加することができればと考えます。その上で、今回新委員長におかれましては、積極的な提案・交渉の実施を行うとのことで、これらの提案・交渉のサポートを行っていく所存です。

【活動を通して】

学友会に所属して一年が経ちました。この一年間の間にはさまざまな出来事があり、それらの対応について追われる日々となりました。特に、昨年度の総合心理学部自治会は学友会が最も重要視する要求実現運動そのものを行える状況にないほど、自治会機能がほぼ停止しており、その機能改善や機能修復といったフロアの再構築というものを行ってま

いりました。フロアの再構築にあたっては、総合心理学部自治会OBの力や当時の総合心理学部事務室長、学生主事といったさまざまな組織に支えられながら、自治会活動を軌道に乗せることに邁進してまいりました。特に、我が自治会独自で企画した某式典については、少なからず批判等もあったものの、今まではそのような批判にさらされることもなかった自治会が、それだけの行動を起こし、結果として多くの学部生から寄せられていた要求を大学側に伝え、実行はできなかつたものの要求を形にするという所まで持っていくことができたことは、フロアの再構築を短期間に行うことができた一つの実績であると考えております。また、2年もの間、総合心理学部自治会においては、五者懇談会を開催することができておらず、要求実現運動自体が停止していました。しかしながら、今回、五者懇談会を開くことができ、新たな学部長、教学部長のもとで新たな学部運営についての協議を行うなどのさまざまな議論を交わすことに成功し、その中で教学関連における学部生からの意見を学部側に伝えるなどの具体的な施策についても言及することができる自治会にまで

成長させることができるようになりました。

このような活動を通して、私が考えさせられてこととして何よりも組織と組織のつながりの重要性がいかにその場その場におけるディシジョンにかかわってきているかということや、何を学ぶことができました。それは言い換えるならばコミュニケーションの重要性であると考えられます。新委員長の所信表明にも書かれていた通り、中央委員会の議論状況の透明化などはまさに組織のつながりを考えるならば最重要課題であると考えられます。そもそも、組織ごとのつながりが分からない中で組織の長が一堂に会する中央委員会では学友会における最高意思決定機関であることは言わずもがな、どのような人物がどのような発言をしているかなどの状況認識を行う上でも非常に重要な議会であることは間違いないはずです。「他者を知ることには知恵。自分を知ることには悟りである」かの有名な老子はこのように述べています。中央委員会の場においても、他学部を知ることの重要性は自身の学部自治や組織のあり方を知ることができる機会になっていると考えられます。この委員会の透明化を行うことは、

これからの持続可能な学友会を実現させていくためにも非常に重要なポリシーであり、私自身が前回の常任副委員長選の際にも最も述べたい施策の一つでありました。現在の中央委員会においては、解任や処罰といった不信任決議の乱発があり、とてもクリーンな組織であるということはお世辞にも言い難い状況にあります。まずはその点の改善策について考えていくことが、サステイナブルな自治活動を行っていく一つのポイントになるのではないかと考えます。その点を常任委員会や中央委員会引いては各学部自治会においては、協議をしていくことで新たな組織体系を作り出し行くことができるのではないかと考えております。

このようにこの一年間における学友会活動を通して、課題や問題などに直面していくなかで、私はさらなる自治活動の活性化に尽力を行いたいと考えております。組織体の維持と組織体の活発化がこれからの学友会には必要であり、新委員長の政策にはその方法が具体的かつ細かく記述されおりました。わたくしとしてもそれを傍で支えることのできる力量はおこがましくも備えていると考えております。それ故に、

改めて常任副委員長として立候補したということであり
ます。

【最後に】

先般、行われた常任委員長選挙において、実質的な所信表明
を行うことができなかったこと、当日出席が叶わなかったこ
とをこの場を借りて改めてお詫び申し上げます。また、わた
くしは、組織とのつながりを大事にするあまり自分自身考え
を曲げてまで、組織運営を行う節があるようです。わたくし
ごとながら、少なからず国政に携わってきた経験があります。
それ故に組織運営における問題を非常に重要視するという
ことがあります。しかしながら、このような国政に携わって
きた経験をこの大学自治組織で活かすことができるのでは
ないかと考えております。若輩者の身ではありますが、何卒
よろしくお願い申し上げます。

以上、中央常任副委員長候補尾崎斗熙の所信表明でございま
した。最後までご拝読賜り誠にありがとうございます。

以上

立命館大学学友会総合心理学部自治会執行委員会 委員長

尾崎斗熙

常任副委員長候補

理工学部 三回生

生駒 竜也

この度二〇二二年度中央常任副委員長に立候補いたしました理工学部ω回生の生駒竜也と申します。常任副委員長に立候補するにあたりまして、本所信表明では私がこれまでに学友会活動で得た経験と、その活動を通じて考えてきたこと、今後一年間で成し遂げたいことについて述べさせていただきます。

私は一、二回生において理工学部自治会に執行委員、会計として所属し、両年とも同学部委員長らと協力の上、五者懇

談会の実施に力を注ぎました。理工学部自治会に入った理由は、当時の教学に不満点があったからでした。理工学部自治会では、「潜在的課題の発見」・「課題意識の共有」について学びました。学生自治を掲げる以上、その活動は主体的でなければなりません。ですがその活動というのは様々な課題の上で成立しており、表面化していないものも多くあります。そのような課題の中に、学友会員が真に解決を望むものが多くあるのです。また、発見した課題をうまく共有しなければ、当然何も進展しないということを感じました。ここで、「共有」の指す範囲は、必要に応じて、所属する団体に関わらず広めるべきであると私は考えています。

コロナ禍で低迷した課外自主活動の支援をしたいという想いから、三回生前期では新歓実行委員会では会計を務め、また後期では会計監査委員会でも副委員長をする傍らで学園祭実行委員会補佐を務めました。この活動において、初めて中央パート以外の団体と関わることになり、学友会は様々な側面から団体を支援しているということについて触れました。

このような活動や大学三年間を通じて感じた次の点を、私

が二〇二二年度常任副委員長として選任された場合の課題とし、政策を掲げ活動していきたいと思っております。

【学友会の課題点について】

一言で述べますと、「学生自治」という価値観が薄まりつつある時代に学友会という組織が馴染まなくなりつつことに尽きると考えています。これはアンケート調査や選挙率に端的に表れています。課題は多く見受けられますが、私は以下の三点を特に注視すべきであると考えています。

・主体者不足・主体者維持力の低下

主体者不足は、近年の経年的な課題として取り上げられてきたにも関わらず、現状は悪化するばかりでした。また、学友会活動の主体者もその業務負担などにより、その活動を続ける者はそう多くはありません。

・学友会員の学友会活動についての認知度の低下

学友会自体は認知しているものの、その活動内容・目的について全く知らないという学友会員は非常に多いと思います。新歓実行委員会でオリター団などの企画書を見た際、何

のために企画書が必要なのかの説明が十分になされていないように思えるといった意見も頂きました。

・留学生視点の不透明性

新歓実行委員会での活動を通じて、この視点の重要性について触れました。現状、学友会では留学生の目線での意見が十分に拾えているとはいいいがたい状況にあると思います。

これらの課題に対する政策の方向性として、以下を提案します。

【方向性】

・業務の効率化

それが誰の仕事で、どのレベルで話し合いを行わなければならないかを、事前にある程度明確化するという習慣・雰囲気作りに取り組みたいと考えています。また、円滑に業務を進めるためには他団体との連携が必要不可欠な場面もあります。そのため、中央パート間でタテとヨコ両方のつながりを持つことができる機会の創出を図りたいと考えています。

・中への発信と、外への発信

発信とは、文字通り学友会活動の発信を指します。中というのは学友会員で、外というのはそれ以外のことです。学友会の活動幅は広く、どの部分をどう発信するのか、様々な団体と協力しながら模索していききたいと考えております。また、適切な発信が主体者の獲得につながるのではないかと思っております。

- ・ 課外自主活動の現状の調査・支援

コロナ禍の影響を受け、多くの課外自主活動団体が危機的な状況にあります。課外自主活動は学生生活の一つの要であり、これを支援することは学友会の存在意義の一つであると思います。そのためにもまず現状を把握すること、現状に応じて適切な打開策を模索することが必要であると考えます。

- ・ 留学生の意見の収集・反映

学園振興委員会と協力の上、留学生に関する項目を全学アンケートに盛り込みたいと考えています。また、学友会の構成員に留学生が増えるような方法がないか、各団体と協力し模索していききたいと考えています。

【全学協議会について】

二〇二二年度には、二〇二一年度に開催予定で延期されていた全学協議会が開催されます。大学側の学費政策に対する議論が中心となることが予想されますが、それだけではなく教員や課外自主活動についても十分議論できるよう、常任役員と協力していきたいと考えております。

【コロナ禍について】

先行きが非常に不透明であり、大学との協議もこの状況に左右されることは間違いありません。あえてこの項目を設けましたのは、二〇二一年度がその状況に振り回されていたと感じるからです。コロナウイルスとどのように向き合い、活動していくかという課題は

、多くの課外自主活動団体が制限を受けているという現状からも避けることができない課題だと考えております。このような状況だからこそ、あらかじめ様々な状況を想定をし、どのように動くかを検討しつつ、柔軟に活動したいと考えています。

【最後に】

さて、最後になります。が、「大学という場」、及び「学友会活動」について想うことについてお伝えして、まとめとします。

私は、「大学という場」は「学び」に集約されると思っています。まず。「学び」というのは正課の活動に限ったことではなく、課外自主活動も含めた幅広いものを指します。この「学び」というのは主に「主体的学び」と「受動的学び」の二つに分かれると考えています。例として、「主体的学び」とは、自ら図書館に出向き自らが学びたいものを学ぶこと、自分で決めた課外自主活動に自分の意志で参加することなどです。

「受動的学び」とは、図書館でたまたま本を手にとって読むこと、友人が参加する課外活動に参加することによって新しい人に出会う、といったことなどです。私が問題としたいのは、後者が十分には保障されていないことに加え、前者が脅かされうるというのが現状であるという点です。これら両方が保障された場こそが「大学という場」の理想であると考え

てます。この理想の実現に一番の可能性を持つ組織が学友会であり、その意味で学友会という組織の担う役割は大きいものだと考えています。しかしながら、「学友会活動」は、数ある「学び」を提供するたった一つの場に過ぎません。私は偶然その「学び」の場を価値あるものと感じただけなのです。そのことをどうか御理解いただければと思います。私が常任副委員長として選出されました際には、学友会員の「学び」を保障・支援するため、また学友会をより良いものとするため尽力してまいりますので、どうぞ皆さま宜しくお願いいたします。以上を私の所信表明とさせていただきます。

常任副委員長候補

文学部 三回生

大道寺 諒

この度、2022年度常任副委員長に立候補いたしました文学部の回生の大道寺諒と申します。この所信表明では、私がどのような人物であるかということ、そして私自身が常任副委

員長という立場で実行したいことを記述いたします。

【はじめに】

私は約 30 年間、学友会の機関の一つである中央事業団体に区分されております立命館大学放送局という団体に所属しておりました。2021 年の 1 年間は局長という立場で各種会議等に参加し、また新歓や学祭などの行事を通じて中央パートの方々との交流をしてきました。

例年、常任役員選挙に立候補する方々は自治会や委員会等の組織に所属した経験があることが多いと思いますが、私にはそのような経験はございません。確かに自治会や委員会等の組織に所属した経験がある方々は、いわゆる「学友会活動」に対して理解があるという観点において優れており、役員になるにあたって必要となる知識を一定程度備えているということの担保になると考えます。しかしながらその利点の反面で、長期間学友会という組織の内部に所属するが故に、そ

の外側からの視点が欠けてしまいがちなのではないかと考えます。そこで、中央パートに属する団体で代表を務めつつも、学友会活動に深く関わったことのない私の視点で意見を述べることで常任委員会、ひいては学友会全体に貢献することが可能なのではないかと考えます。

【学友会に対する問題意識】

私自身、放送局の局長として学友会の運営を担う方々と交流するようになる以前は、自治会の名前を知っているくらいで他の中央パートの団体がどのような活動をしているか全く知りませんでした。全学アンケートの回答率や自治会委員長選挙の投票率を鑑みましても、多くの学友会員がこのような認識であろうと考えます。つまりは学友会がその会員に十分に認知されていないと感じております。

また、放送局の局長として中央パートの内情を理解するにつれ、「主体者」の不足を感じました。それにより現状の主体者が過度な業務の負担を強いられており、そのことが原因でさらに主体者の不足を招くという悪循環に陥っていると

考えます。

【常任副委員長としての展望】

公示において示されていた常任副委員長の職務は「常任委員長」の補佐」でした。これは立命館大学学友会会則にも同様に定められております。では先日、常任委員長に選出された石川寛太さんを常任副委員長として、どのように補佐していくかについて述べたいと思います。

石川さんの所信表明において、政策の方向性の一つに「持続可能な学友会の転換」がありました。そして具体的な施策として「学友会活動の見直し・再生産を目的とした常任委員会戦略・企画室（仮）の設置」とあります。私は当該室の設置、並びにその運営に尽力したいと考えております。そして戦略・企画室（仮）の取り組みとして、学友会「主体者」を増やすことを目的として新歓期にリクルーティング活動を実施したいと考えております。これは学友会の知名度を向上のための広報活動にもなりうると考えます。すなわち、上記

の学友会の問題を解決する上で最も有効なのではないかと考えております。

また、先述しておりますが私は約 10 年間放送局に所属しておりました。当該活動を通じて、ステージの運営方法や配信番組・ラジオ制作、機材、編集技術などさまざまな知識を学び技術を身につけました。これまで得た知見を活かしまして常任戦略・企画室（仮）の運営、そしてコンテンツづくりに励みたいと考えております。

【おこし】

2020 年の春学期、新型コロナウイルス観戦拡大の影響で全面オンライン授業になりましたが、その際に大学に対する不満（学費の返還や対面授業への要望など）について、学友会を頼らず個人の SNS を通じて行動をしている人がいたことを覚えています。本来、大学に対して学生の意見を主張することは学友会が担わなければならない役目の 1 つでありましよう。しかしながら、個人で自由に意見を発信できる情

勢において、学生の意見をまとめて発信する役目を果たすという需要は減退しているのではないかと感じます。この需要の変化に対応するために、学友会の変革が必要なのではないかと考えます。このような状況下において、学友会のあるべき姿について可能な限り多数の人と議論し、その中で私自身が変容する学友会の礎の一部となれたら幸いです。

投票日一月十三日

立命館大学中央常任委員会
同選挙管理委員会